

令和 6 年 6 月 15 日現在

機関番号：34317

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13351

研究課題名（和文）中世荘園制の展開と環境復原

研究課題名（英文）Development of the medieval manorial system and landscape restoration

研究代表者

吉永 隆記（YOSHINAGA, Takanori）

京都精華大学・人文学部・講師

研究者番号：20778964

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、中世荘園の環境復原を目的に、地名・屋号・地形・地域伝承などに注目し、歴史地理的観点から地形や公図との比較検討を進めた。さらに、各地域の地名をはじめとする歴史情報のアーカイブ化も目標として調査を進めることができた。

その成果として、備中国で2地域、丹波国で2地域の計4地域を対象として、地名と現地景観の確認および撮影、地形の確認等を行うことができた。こうした成果は、史料の乏しい荘園の環境復原を進める基礎情報の整理として、今後の活用を見通している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中世荘園研究は、豊富な史料の残存状況に恵まれた素材を中心に進展してきた経緯があり、その成果の蓄積も膨大であるといえる。一方で、中世荘園が存在したことは分かっているものの、関係史料が限定的であるがゆえに、研究対象にすらされてこなかった荘園も数多ある。

本研究では、これまで史料的制約から注目されてこなかった荘園や、現地調査や地名情報の蓄積が少ない荘園を取り上げることで、多角的に中世荘園の環境復原を試みようとする取り組みである。

研究成果の概要（英文）：With the aim of restoring the environment of medieval manor houses, this study focused on place names, house names, topography, and local traditions, and compared them with topography and official maps from a historical-geographical perspective. Furthermore, we were able to proceed with the research with the goal of archiving historical information, including place names in each region.

As a result, we were able to confirm and photograph place names and local landscapes, and confirm topography in four areas, two in Bicchu Province and two in Tamba Province. These results are expected to be utilized in the future as basic information for the restoration of the manor house environment, for which historical records are scarce.

研究分野：日本中世史

キーワード：荘園 環境復原 地名

1. 研究開始当初の背景

本研究の基本姿勢は、日本中世の荘園研究に対し、文献史学だけでなく、地理学の調査・研究手法を取り入れた分析・検討を行おうとするものであった。近年、中世後期の荘園制が室町幕府権力と密接に展開し、国家体制として再編されたとする「室町期荘園制論」の視角は、学界に定着しつつある。ただ、荘園制を国家支配の体制として重視するだけではなく、地域社会の視点から当該期の荘園制を再検討する必要性も強く感じている。また、史料的制約が課題となっていた個別荘園の検討に対しても、多様な検討方法を用いた荘園研究を試みていくことが重要であろう。例えば、地理学の研究手法を荘園研究に取り入れることで、荘園の環境復原研究が大きく進展することが期待できる。そこで本研究では、近年の荘園研究でも援用されるようになった地理情報ソフトの活用や、その他の地理学的研究手法に学びつつ、荘園の歴史地理情報を収集・分析し、文献史学の限界を、地理学をはじめとした様々な研究手法から明らかにしようとしたものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、歴史学的手法のみならず、地理学手法を積極的に取り入れ、地域社会に即した荘園研究を進めていくことにある。すなわち、これまで文献史料をもとに進められてきた荘園研究に対し、地理学分野の分析視点を取り入れつつ、現地情報の蓄積を進めることで、史料的制約という課題を乗り越えた荘園研究を実施していくことを長期的な目的としている。

そもそも、戦後の荘園研究は、文献（文字）史料をもとに進められてきたものがほとんどであり、こうした伝統的成果に考古学の発掘成果を援用する手法はよく用いられてきた。しかしながら、本研究で試みようとしているフィールドワークによる地名検証などは、地理学分野の手法を取り入れた試みとなる。すなわち、文献史的な検証方法に拠ってきた日本中世の荘園研究に対し、地理学的手法を援用することで、史料的制約からの脱却が可能であることを提示することに本研究の意義があるといえよう。こうした歴史地理学としての手法が荘園研究に援用されれば、史料的制約のある地域についても、今後の研究発展が期待でき、考古学や民俗学を踏まえた研究へも発展させることが期待される。

なお、とくに研究手法面で本研究の前提となる先行研究成果としては、服部英雄著『景観にさぐる中世一変貌する村の姿と荘園史研究』（新人物往来社、一九九五年）、同『地名の歴史学』（角川書店、二〇〇〇年）、海老澤衷編『中世荘園の環境歴史学』（吉川弘文館、二〇一八年）、金田章裕編『景観史と歴史地理学』（吉川弘文館、二〇一八年）などがある。

3. 研究の方法

（1）研究の手法

本研究がどのような手法を用いたかについて、以下で概要を述べておきたい。まず、現地調査に先立って、調査対象地域とした荘園や村落についての文献史料を調査し、史料から得られた情報を整理した。本研究の目指すところとして、文献史料の情報が乏しい地域の歴史を明らかにすることも挙げられるが、限られた情報にどのようなものがあるのか、現地の景観に関わる情報が無いかという点を中心に文献調査を実施した。文献情報を整理した後、調査対象地域の小字地名を把握するため、管轄する法務局などを訪問し、近代初期の地籍図（公図）を中心に地名情報を収集した。この段階で国土地理院地図などと対照させ、現在の地図地名と一致する地名については、現地比定が可能であった。一方、現在の地図と対照させても比定ができなかった地名については、現地調査での聞き取りなどで地名比定を試みることとなった。同時に、法務局では可能な範囲で地番図も確認し、小字地名の境界についても情報を収集することとした。

そして現地調査にあたっては、調査対象地域がいずれも山間部や交通の少ない点、荘園故地の範囲内を何度も往復しながら調査を行う点から、自動車（レンタカー）による調査が中心となった。事前に文献調査や地図・公図類から得られた情報をもとに、小字地名と対応する現地景観を記録することが主な目的であった。また、地名比定の出来ていない箇所については、現地住民からの聞き取りなどで可能な限り特定することに努めた。加えて、地元でしか把握されていない小字地名なども収集した。なお、得られた地名や屋号の情報のほか、地形や水路などの情報については、調査地ごとに情報量に差があった。

（2）実施計画と変更点

当初の本研究計画は、設定した二つ地域を調査し、特に地名や屋号といった情報を地域歴史情報アーカイブとして整理・保存することを第一の目標としていた。まず、東寺領荘園として著名

な備中国新見庄を含む、岡山県の一級河川・高梁川流域に所在した諸荘園を一つ目の調査地域に設定した。高梁川流域に注目した背景として、この河川流域は豊富な産鉄地であり、近世から近代にかけて鉄穴流しによる採鉄が盛んであった点が挙げられる。このことを鑑みて、産鉄という特性をもつ荘園に着目することとした。なぜならば、荘園研究で著名な備中国新見庄においても、中世段階で鉄の採取や売買取引が行われていたことが注目されているためである。具体的な候補は計画段階で複数あったが、結果的に高梁川流域に属する石清水八幡宮領吉川保（岡山県吉備中央町吉川ほか）や相国寺領大井庄（岡山市北区大井ほか）を調査対象地域として定めることとなった。いずれも確認できる史料情報は断片的であり、荘園領主側の支配は認められるものの、在地社会の様相・景観などは、文献史料からはほとんど分からない。備中国高梁川流域においては、この二地域を対象として、小字地名や屋号などの情報を収集し、産鉄に関わる情報にも留意することとした。

次に、別地域の荘園についても調査を実施することを計画していた。具体的には、祇園社領であった丹波国波々伯部保（兵庫県丹波篠山市上宿ほか）である。当保については、文献史料からの情報もある程度豊富であり、筆者も以前より関心を寄せていた地域であった。しかしながら、本格的に荘園現地調査が入ったことはなく、現地に残されている小字地名などについての情報整理は行われていないようである。

同様に、荘園絵図で著名な神護寺領吉富本庄内に含まれる宇津庄についても調査を行うこととした。当初の計画では、丹波国では波々伯部保のみを調査対象としたが、著名ながら調査が不十分な丹波国の荘園として宇津庄も調査地に加えることとなった。その背景には、当地域から古文書調査の依頼があり、地域の歴史情報を収集するなかで、近隣の著名な荘園（禁裏御領丹波国山国庄など）と比較して、あまり地名や屋号の調査がなされていないことが浮かび上がったためである。

以上の計画を前提として、実際に研究を進めてみると、その過程で新たに調査地が追加されることがあり、逆に限定せざるをえないこともあった。具体的には、備中国高梁川流域の調査をするなかで、当国一宮である吉備津神社（岡山県岡山市北区吉備津）の社領も高梁川下流域に展開しており、大井庄などの調査過程で関連情報を得られたことが挙げられる。そのため、吉備津神社に残された史料類も調査対象に加え、高梁川下流域に位置する吉備津神社領での荘園支配や解体について、思わぬ成果も得ることができた。

一方で、備中国で検討対象とした二地域のうち、石清水八幡宮領吉川保については、その全体の調査は断念し、産鉄に関わる地区として黒山村地区に限定して調査を実施することとなった。黒山村以外については、今後の課題として継続的な調査を進展させていく予定である。そして相国寺領大井庄については、その荘域の広さもあって全域での調査から北部地域の調査に切り替えることとした。そして同庄北部に位置した間倉村を対象地とし、現地調査を実施したうえで景観復原を試みている。南部地域などについては、上記吉川保と同様に今後の継続調査を進展させていく予定である。

また、丹波国を対象とした調査についても計画段階からの変更を行っている。計画段階では祇園社領波々伯部保のみを対象地としていたが、上述の通り神護寺領吉富本庄内の宇津庄も調査地域に追加することとなった。宇津庄については、史料調査をきっかけとして現地調査が実現し、地名ほか屋号などの聞き取り調査でも成果を得ることができた。しかしながら、丹波国の二地域については地名・屋号情報の収集・整理は進んだものの、目標としていた景観復原については十分に検討を深めることができず、課題を残した点も多い。

上記の通り、本研究の計画は当初の段階よりも調査対象地を追加した一方、荘園全域の調査が実現したのは波々伯部保と宇津庄となっており、備中国の二地域については一部調査に限定せざるを得なかった。また、いずれの地域についても地名や屋号調査の実施で留まり、景観復原まで試みることができた地域は備中国大井庄間倉村であった。度重なる計画の変更を余儀なくされたのは、本研究が開始された二〇一九年度後半より世界的流行をみた新型コロナウイルス感染症の影響を受けたためである。現地調査の実施を主体とする本研究において、新型コロナウイルス感染症の拡大による行動制限は、深刻な問題となり、研究期間の延長をせざるをえない状況となった。とりわけ自治体をまたぐ移動制限が後を引いたことにより、思うように聞き取り調査などが実施できなかった事情もある。このため、実施できた調査内容は計画段階と比較してやや不十分なものとなった。

4. 研究成果

本研究の成果を概括すると次の通りである。

まず、備中国を対象とした成果のうち、相国寺領大井庄については、荘内北部に位置する間倉村の現地調査を実施し、小字地名や屋号などを詳細に収集・整理することができた。とりわけ、明治期の公図類にも記載のなかった山間部の小字地名を住民から聞き取れたことで、景観復原の参考にすることができた点は、大きな収穫であったといえる。また、大井庄の近隣に位置する備中国一宮の吉備津神社の社領についても、関係史料から分析を行った。とりわけ、吉備津神社領では保頭と呼ばれる現地の沙汰人層が確認でき、大井庄にも同様の存在が確認できることから、高梁川下流域の荘園の共通点として注目した。その成果の一部は、論文「戦国大名毛利氏に

よる備中一宮社領への段銭賦課」として志賀節子・三枝暁子編『日本中世の課税制度一段銭の成立と展開』（勉誠出版、二〇二二年五月）に収録されることとなった。そして大井庄北部の間倉村に隣接するのが石清水八幡宮領吉川保の黒山地域である。当地域についても、現地調査を実施し小字地名や屋号などを詳細に収集・整理することができた。しかしながら、景観復原も含む検討と考察は課題として残すこととなった。今後、公図類との対照や補足調査も経て、詳細な検討を継続していく予定である。

次に、丹波国を対象とした成果では、祇園社領波々伯部保の現地調査を実施し、小字地名やなどを収集・整理し、現地比定などを行うことができたため、一定の成果を得ることができた。そして神護寺領宇津庄についても同様に現地調査を実施し、小字地名および屋号などの情報を収集・整理することができた。景観復原に向けた基本情報の収集については成果を得られた。加えて、当地域に関係の深い史料調査も並行して実施することができた。具体的には、中世に宇津庄を拠点とした宇津氏に関わって、その菩提寺と本末関係を有した光福寺（京都市左京区田中上柳町）に残された卷子などの諸史料と、当地域内で残されていた個人蔵の古文書群である。後者については、ほぼ近世の村方史料と近代以降の村政史料に大別されるが、中世以来当地域の主要産業であった林業についての情報も豊富であり、中世荘園の検討と共に参照すべきものも多かった。この史料調査の成果は、既発表のものとして「光福寺所蔵卷子本の紹介一」・「光福寺所蔵卷子本の紹介 二」（それぞれ『京都精華大学紀要』五六号・五七号、二〇二三年・二〇二四年）があり、さらに「京北宇津地域史料の紹介（仮）」を『京都精華大学紀要』五八号（二〇二五年三月刊行予定）にて発表予定である。そして研究成果全体を総括したうえで、上記の四地域の調査成果を研究成果報告書『荘園情報のアーカイブ化と環境復原—備中・丹波—』（二〇二四年）としてまとめた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 吉永隆記	4. 巻 57
2. 論文標題 光福寺所蔵卷子本の紹介 二	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『京都精華大学紀要』	6. 最初と最後の頁 257-264
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉永隆記	4. 巻 56
2. 論文標題 光福寺所蔵卷子本の紹介 一	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『京都精華大学紀要』	6. 最初と最後の頁 299 - 310
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大久哲・門井慶介・吉永隆記
2. 発表標題 「ムラの戸籍簿」データベース紹介
3. 学会等名 第6回「ムラの戸籍簿」研究会シンポジウム
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 吉永隆記	4. 発行年 2024年
2. 出版社 吉永隆記	5. 総ページ数 52
3. 書名 『荘園情報のアーカイブ化と環境復原 備中・丹波 』	

1. 著者名 志賀節子・三枝暁子編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 224
3. 書名 『日本中世の課税制度－段銭の成立と展開－』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>科学研究費助成事業研究プロジェクトの紹介 https://www.kyoto-seika.ac.jp/researchlab/?post_type=project&p=3613</p>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------